（ 続紙 1）

京都大学	博士（教育学）	氏名	髙谷　掌子
論文題目	西田幾多郎「私と汝」論の生成と発展 —汝との応答を通した〈自覚の始まり〉—		

（論文内容の要旨）

本論文は、哲学者・西田幾多郎（1870-1945）の「私と汝」論における「自覚」概念を通して、教育学者・森昭（1916-1976）の「人間生成」論における「自覚主義」批判に応答したものである。

今日、京都学派が日本の教育学に与えた影響の再評価が進んでいるが、その際、西田哲学は学説史研究の一環として参照されるに留まり、西田哲学それ自身がもつ教育学的思考の可能性は十分に追究されてこなかった。

それに対して、本論文は、学説史研究の成果をもって、西田哲学を読み直す。具体的には、戦後の教育学が西田哲学から引き継がなかった点を明らかにし、それに対する西田哲学からの応答を示す仕方で、西田哲学から始まる教育学的思考の可能性を探求する。

手がかりは、森の「人間生成」論における「自覚主義」批判である。森は京都学派の系譜上にある人物であるが、戦後、京都学派からの影響を自ら否定したと語られてきた。確かに大著『教育人間学』(1961 年）をはじめとする戦後の森の著作は「自覚主義」を批判する。自覚主義は「人間は自覚する存在である」という定義から出発する。それに対して森は、「人間は自覚するようになる」という定義をもって経験科学的に「人間生成」を研究しようとする。「自覚（自覚する存在である)」に対して「生成（自覚するようになる)」の意義を強調した点で、森は、京都学派の哲学に対して、教育人間学の独自性を主張した。

また従来、森の思想形成においては、その師・田邊元との関係が注目されてきたが、本論文は、西田との関係に注目する。森の「自覚主義」批判が、実は、田邊による西田哲学批判と共通性を有していたためである。田邊による西田批判の眼目は、西田哲学においては自覚の事実が既に「与えられたもの」とされており、これを「求める」という生成の営みが見過ごされてしまう点に向けられていた。森も同じ批判を「自覚主義」に向ける。自覚の所与性を批判し、むしろ自覚の「生成」を強調した。とすれば、森の「自覚主義批判」は、田邊に向けられた批判ではなく、むしろ田邊による西田批判を継承したものと想定される。

こうして本論文は、森の「自覚主義批判」を、「森から西田哲学への問い」として設定し直す。西田哲学は「自覚の事実」(「人間は自覚する存在である」）を前提とし、自覚の「生成の事実」(「人間は自覚するようになる存在である」）を看過したのではないか。しかしその問いは、西田哲学の側から言えば、森が西田哲学の中に「生成の事実」を認めなかったということである。本論文は、戦後の森が、西田哲学から引き継がなかった点に光を当てることによって、西田哲学における「自覚の事実」の意味を問い返す。

具体的には、西田の論考「私と汝」が詳細に検討される（『無の自覚的限定』1932 年、所収)。その中で西田は、田邊からの批判に応答して、「永遠の今の自己限定」という時間論を展開する。自覚はすでに「与えられたもの」ではなく、さりとてこれから「求める」ものでもなく、まさに今〈始まる〉ものである。こうして〈始まる〉自覚は、実は「人と人との空間的関係」に基礎づけられていると論じるのが「私と汝」論であ

る。自覚は汝との応答を通して、一瞬一瞬に新たに〈始まる〉。とすれば、「私と汝」論における「自覚」概念は、〈自覚の始まり〉に焦点を当てていた。西田哲学における自覚は単に「与えられたもの」ではなかった。

しかし、さらに、西田哲学は「自覚が〈始まる〉」というそのことを所与の事実として前提にしていたのではないか、という批判が可能である。問題は、自覚が〈始まらない〉と訴える「汝」が現われたときに、「私」は何をなしうるかである。本論文は、その問いを「私と汝」論以降の西田哲学において検討する。とりわけ、論文「私と汝」の翌年に執筆された西田の教育学論文と、その宛先とも考えられている弟子の木村素衛との師弟関係に着目している。

こうして本論文は二つの焦点から成り立つことになる。第一に、西田の「私と汝」論における「自覚」概念が〈自覚の始まり〉に注目していたこと（第一部「私と汝」論の生成―自覚はいかにして〈始まる〉のか)。第二に、西田が〈自覚の始まり〉を伝えようとしていたこと（第二部「私と汝」論の発展―自覚を伝えるとはどういうことか)。

以下、第一部（第 1 章―第 5 章）は次のように展開する。

第 1 章は、西田哲学における「私と汝」論の位置づけを先行研究に拠って明らかにする。「私と汝」論における〈自覚の始まり〉は、西田哲学の中期から後期へと移行する時期に当たり、西田哲学がその独自性を見せ始めた中期の「場所」論の深みを保ちつつ、次第に後期の「歴史的世界」へと開かれていく途上にある。

第 2 章では、「私と汝」論における「自覚」が、特に「情意的自覚」として性格づけられることを明らかにする。中期の西田哲学において「情意的自覚」が中心的な位置を占めるに至った経緯を明らかにし、アウグスティヌスの愛の概念からの影響が重要であったことを指摘する。

第 3 章では、「私と汝」論に至る直前の西田哲学が展開した「永遠の今の自己限定」という時間論を検討する。「隣人愛」の困難と「歴史の非合理性」の説明不足という二つの課題が、いずれも「時」と「永遠」の関係に関わることを示し、それに対して、西田は「永遠の今の自己限定」および「非連続の連続」という時間論で答えたことを示す。

第 4 章では、「私と汝」論における〈自覚の始まり〉の構造を、「絶対の他」をキーワードとして明らかにする。「絶対の他」は、「自覚」において「見られた自己」であるとともに、「汝」でもあるという二義性を有する。この「絶対の他」の二義性において、「真の時」を生み出す「自覚」と、「私と汝」の「空間的関係」とが交錯する。それゆえ、時が「永遠の今」から〈始まる〉ということは、私の「自覚」が汝との「応答」から〈始まる〉ということに基礎づけられる。しかし、精神科医・木村敏（1931-2021）による「私と汝」論解釈によれば、統合失調症患者においては「絶対の他」が成立しない。この指摘を受けて、本論文は、自覚が〈始まらない〉と訴える他者に対して、〈自覚の始まり〉を伝えるとはどういうことかという問いを立て、第二部の探求課題とする。

なお、第 5 章は、「私と汝」論から「歴史的世界」論としての後期西田哲学への転回を準備する考察として、この時期の西田哲学における「哲学史」の意義を検討している。この「哲学史」の試みを通して、後期西田哲学は「歴史的実在」をその内側から見る視点を獲得したことが示される。

第二部（第 6 章―第 8 章）は次のように展開する。

第 6 章は、西田の教育学論文における〈教育＝一種の形成作用〉という定式の意義

を、それまでの西田哲学における「形成作用」の意味から明らかにする。この定式は、教育者が一瞬一瞬に自己の行為の限界に触れるとともに、それを越えて被教育者が自己形成をなす作用を指していた。

第 7 章では、西田の教育学論文における「自由」の意義を、弟子の木村素衛が西田に対して投げかけた「自由意志」の問題を切り口として考察する。西田の教育学論文は、木村に視野を広げるよう勧めたもの、具体的には、自らの行為を「社会的・歴史的世界」における行為と見るように勧める内容であったことを明らかにする。

第 8 章では、西田の教育学論文以降の西田と木村の応答を、双方の「歴史的自然」概念を検討することを通して明らかにする。教育学に転身してからの木村は、西田の「歴史的自然」概念を取り入れつつ、「表現的生命」の教育哲学を構築するが、自然と人間の調和のみを考察し、不調和を見逃していたと批判されてきた。それに対して、西田の「歴史的自然」概念を参照し、木村が取り入れなかった「死を含む生命」という考え方に注目することによって、木村の「教育」の規定に自然と人間との不調和を読み込む可能性を示す。

終章は、西田哲学から森教育人間学に対する応答である。第一に、「私と汝」論における「自覚の事実」は、「〈自覚の始まり〉の事実」である。「自覚」を所与の時間の中で考えるのではなく、「自覚」と同時に〈時が始まる〉と考えた点で、西田は徹底して動的に〈自覚の始まり〉を見ていた。第二に、他者の〈自覚の始まり〉を他者になり代わって語ることは不可能である。〈自覚の始まり〉を伝えるに当たって、西田は「自覚」を直接に語るのではなく、他者との「応答」を通して、他者の〈自覚の始まり〉を媒介するような「汝」となろうとしていた。第三に、「自覚」は一度到達するとそのまま完成してしまうのではなく、すべての瞬間において新たに〈始まる〉事実である。森の教育人間学における生成の事実と同様に、西田哲学の〈自覚の始まり〉の事実もまた〈始まる〉ことの不確実性に根差していた。

（続紙　２）

（論文審査の結果の要旨）

本論文は、哲学者・西田幾多郎（1870-1945）の「自覚」概念の検討を通して、教育学者・森昭（1916-1976）の「自覚主義」批判に応答したものである。

近年、京都学派が日本の教育学に与えた影響について、再評価が進んでいる。その際、西田哲学は、学説史上の過去の遺物として参照されるに留まっていたのに対して、本論文は、西田哲学それ自身の内に教育学的思考の可能性を見る。正確には、戦後の教育学が西田哲学から「引き継がなかった」側面に注目することによって、戦後の教育学とは異なる仕方で、西田哲学から始まる教育学的思考の可能性を浮かび上がらせている。

出発点は、森の「人間生成」論における「自覚主義」批判である。「自覚主義」は、「人間は自覚する存在である」と定義する。それに対して、森は「人間は自覚するようになる」と主張する。つまり人間の「自覚」ではなく「自覚の生成」を追究した。従来この点については、森の師・田邊元からの影響が注目されてきたが、本論文は、むしろ森と西田の関係に注目する。そして森の「自覚主義」批判が、実は田邊による西田哲学批判と共通する構造を持つことを明らかにする。

こうして本論文は、森の「自覚主義」批判を「森からの西田哲学に対する問い」として設定し直し、その上で、森が西田哲学の中に見落としていた位相を浮かび上がらせることを通して、西田哲学に秘められた教育学的思考の可能性を描き出すという複雑な構図を持つ。そしてその問題を、西田の論考「私と汝」(『無の自覚的限定』1932年、所収）に即して極めて詳細に検討する。西田哲学における「私と汝」論の位置づけを先行研究に拠って確定し、「私と汝」論に至る直前の西田哲学が展開した「永遠の今の自己限定」という時間論を検討し、「私と汝」論における〈自覚の始まり〉の構造を、「絶対の他」をキーワードとして明らかにする。

本論文は、以下の点において、極めて優れていると判断される。

一、議論の組み立て方が卓抜である。西田哲学研究として言えば、森昭という教育研究者の「自覚主義批判」を補助線として設定することによって、これまで論じられることのなかった西田哲学の「教育学的思考の可能性」を見事に浮き彫りにして見せた。他方、教育学の学説史として言えば、戦後の教育学が十分に受け継いでこなかった京都学派の思想の可能性を、教育学説史の議論に即して提示することに成功している。

二、より具体的に言えば、従来の通説が見逃してきた側面に光を当てる議論の構成が巧みである。森の思想形成と西田哲学との関係で言えば、これまで注目されてこなかった森と西田との関係について、本論文は、1）田邊による西田批判に注目し、2）その批判と森による「自覚主義批判」との同型性を見抜くことによって、3）森と西田の対立点を明確にし、4）その上で、西田哲学の側から森の批判に応答するという手続きを踏む。同様に、木村素衛の教育学についても通説を覆し、西田の「教育学論文」が西田から木村への一方的なエールではなく、事前に交わされていた木村からの問いに対する応答であったことを、詳細なテクスト分析から明らかにしている。

三、正確で緻密なテクスト読解が、一見大胆に見える議論の構成を確実に論証することを可能にしている。例えば、中期の西田哲学におけるアウグスティヌス研究の詳細な解明、あるいは、「永遠の今の自己限定」という時間論に関する明快な整理など、その後の議論を論証してゆく際の確かな土台となっている。また、「絶対の他」を論じる際に援用される精神科医・木村敏（1931-2021）による「私と汝」論解釈も、自

家薬籠中のものとして議論に組み入れ、第一部から第二部への転換を促す礎石として見事に使いこなしている。丁寧なテクスト読解を土台とした巧みな議論の進め方は高く評価される。

口頭試問においては濃密な質疑応答が交わされた。例えば、1）人間関係の意味や内容（セマンティクス）ではなく、構造や文法（シンタクス）に注目することの妥当性、2）ユング心理学における「魂」と西田哲学における「自覚」の関係、あるいは、「我々が自覚の中にある」という理解と西田哲学における「自覚」の関係、3）西田哲学の国際的研究交流の現状と今後の可能性、4)「自覚を教えることはできるのか」という初発の問題意識との関連など。申請者はこうした問題について適切に応答するのみならず、今後の研究の更なる展開を示し、あらためて本論文の価値を審査委員に再認識させた。

よって、本論文は博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。また、令和４年１月６日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第１４条第２項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日：　　年　　月　　日以降